

木幡順三の現象学的態度

——「無知の自覚」への道

柳澤 広美 (成城大学)

木幡順三(1926-1984)は、「美的体験」の語が通用するなか、あえて「美意識」の語を使用し続けた。それは、前者では汲み尽くせない意味を後者に託していたからである。それはすなわち、美意識が生を支える持続的かつ動的なもの、「求道性」を持つものだという意味であり、晩年の著作である『美意識論』(1986)と『求道芸術』(1985、執筆時期は『美意識論』より後)に結実している。

こうした独自の思想はいかにして形成されたのか。彼が影響を受けたものとして容易に指摘できるのは、現象学である。とりわけフッサール現象学の方法による美学研究は、美学の入門書として書かれた『美と芸術の論理』(1980、1986)を貫く基本姿勢であり、研究の初期からの論文集は『美意識の現象学』(1984)と名付けられた。そうした現象学的態度と、美意識の求道性という独自の思想との関係はこれまで明らかにされていない。

木幡は美学が「本質直観」を目指すべきだと考え、「自然的態度」を「エポケー」する「現象学的還元」により「純粹意識」が獲得されるというフッサール現象学の基本姿勢を引き継ぐ。その限りでは現象学の方法が美学の領域に応用されただけで、彼独自の思想ではない。しかし、「純粹意識」の領域である「超越論的主観性(transzendente Subjektivität)」の語の使用には別の思想を見ることができるといえる。この語は『美意識論』においても度々用いられ、「驚異的体験」が「激しくこれを打つ」ことによるのみ、美の「頹落」を防ぐことができるという。この「驚異」概念はアリストテレスら古代の言説に依拠するものの、それを哲学だけでなく美意識の根源としても認めたのは独自の思想であり、さらにそれをフッサールの語と接続させたのも独自の態度である。あらゆる認識構成の究極の源泉に立ち返ろうとする「超越論的」の語に美意識を重ねる態度が、知と美の源泉を同じとする思想へ繋がったと考えられる。

最晩年の『求道芸術』には「超越論的主体性」の語が出現するが、これは「主観性」でも良い「主体性」ではなく、彼独自の態度による語だと思われる。上述の驚異体験の内容とは「無知の自覚」であり、そこには主客両面にわたる驚異の機能によって、「主体」が自らを「反省」し、それによって自らが「変様」するという意味がある(『美意識論』)。すなわち「無知の自覚」とは「求道」の過程にあるもので、必ず実践主体の生の連続のなかにある。したがって、「主体性」にかかる「超越論的」の語は、「求道」による全人的な変化を導くものとなる。このように、一見すると求道性から遠く離れた現象学が、実はその源泉となっている。「無知の自覚」それ自体に現象学の影響が見出せずとも、それを導く論述は現象学的態度を欠いては成立しない。彼の現象学的探究が晩年の求道の境地を用意したといえるのだ。